



池田文庫

二十七

池田文庫  
二七



5  
1139  
58



5  
1139  
58



Handwritten text in a cursive script, possibly a list or account. The text is written vertically and includes several lines of characters that are difficult to decipher due to the cursive style and fading. Some legible fragments include "1900", "1901", and "1902".

親を討つてあつたはるゝと云ふは  
よかく母をばしるゝと云ふは  
蕉芋米のやうな花に海にまきこむの巻  
かほりきよのけしきやまに照らするは  
よしの花をばしるゝと云ふは  
よからに花にまきこむは  
流るゝ思ひをばしるゝと云ふは



海に下つては海に下つては  
花の葉をばしるゝと云ふは  
河とまきこむは海をばしるゝと云ふは  
母をばしるゝと云ふは

よまきこむ日 大に費す後



從栢木  
太平山遠望雲山圖

老畫



三つむさ古集

あゝ今もが〜りふふ〜りるは

慕 欣

小春 日初 の 暮る 秋 始 なる

優 へ

名 風 只 を 遠 り ぬ ち 娘 を 抱 へ

白 疾

昔 籍 を 舟 へ 也 せ せ る 舟 内

優 欣

昔 小 舟 へ 眺 る 月 の う 光 を 照 ら

疾 優

冷 しく しく 州 能 上 風

疾 優

は ま ち 葉 の 露 探 せ ぬ 遠 端

欣 疾

娘 くら ー を 抱 け け け け や け

優 疾

眼 を 洗 へ 葉 を ぬ ぐ ぬ ぐ ぬ ぐ

疾 優

い つ も 裏 へ 入 入 入 入 入 入 入

欣 疾

空 へ 光 の 近 け 来 け 来 け 来 け

優 疾

あ 葉 の へ へ へ へ へ へ へ へ

疾 優

州 籍 を ぬ ぐ 留 留 留 留 留 留 留

欣 疾

野 の 遊 合 を 志 せ ぬ 見 せ 居 る

優 疾

面心もさくく付くも終古終  
口きく人よりの古板立  
阿ふり興さくさくを折ちらし  
鏡心ちん終よとのぬのとのぎ  
毒の回しよんをい川をせきよめ  
晩のほろよ 鉄の歩合  
戯の様呼ぶむほり部屋  
多活りのをりの窓の為書

歌 優 歌 歌 歌 優 歌

暮桶の氷くうさき日あり  
やうとまよ入室咲然り免  
言持と養もやさしく迷惑さ  
松皮よりういせ殿の屋根  
出娘いふ人小言句のうらり様  
秋も葉の風を何くくあ  
月うさ布のくさる飛鳥をなせ  
相葉をりやうせる斬の家けき

優 歌 歌 優 歌 歌 優 歌

何昇よりそとらせたる是居者  
 ぬきよくと 難き 袖 笠  
 恒より 難きれ 状を 投 込  
 初年 亦 能き 衣 出 代  
 いそ 難きく 妻より 難き 衣 出 代  
 初より 遊より 難き 衣 出 代

恒 難きく 妻より 難き 衣 出 代  
 初より 遊より 難き 衣 出 代  
 恒より 難きれ 状を 投 込  
 初年 亦 能き 衣 出 代  
 いそ 難きく 妻より 難き 衣 出 代  
 ぬきよくと 難き 袖 笠  
 何昇よりそとらせたる是居者

夜ふゆの陽よ露のまはけふ  
 市の音を能く人の声く  
 春をを知らず春を春中  
 流をよめりて念佛の痛  
 少水合ふ四十男の茶能若物  
 上戸よ鳥の尾をまらる  
 月と星の程麻入はあまらる  
 吹る休む焼帛の真

夜 次 優 次 夜 優 次 夜 次 優 次 夜

良室よ連る出たり 京 祿  
 質孝のまゆるらんを 桐 卯  
 須富のまゆるらんを 山 庭 口  
 小つと伝へるる 勢 の 葉  
 暖よ江守のまゆるらん 風 山 院  
 小つと伝へるる 勢 の 葉  
 伽よまゆるらん 勢 の 葉  
 唱よまゆるらん 勢 の 葉

夜 次 優 次 夜 優 次 夜 次 優 次 夜



たりのめきよなる端午の佳節なり

多むく 深く 汗の手に拭

竊<sup>ホ</sup>藪<sup>ヤ</sup>あきの目ををるこし古板

難魚のふ目を撰りかきおく

戸を横よ一寸のめきの粒を古

油起しせし 月の夕 暮

新結の縁むくもあくあま上り

毛のんのうくもく 端しむい

優

次

優

次

優

次

優

次

この春よ名おの温水を汲りせし

新し過りの未刻色の晴

張りの刷毛の序に半障子

筆の根を帯りしぬよきる 若

池水の波よゆききききの序

横りよはれしききる 窓の畔

次

優

次

優

次

優

水仙やまゝのまゝと花きの色を好

優

宵のこらちよきつる初雪

白

竹福よりの襟袷格いせ

景

こつはつり能葉のよ

優

きんくう浪風通る樹の月

景

龍の喜了蕙花のあ

景

隣まゝ林の割下結引きり

優

美心むの能花をあら

景

お家よ娘もすゝる

景

好まきととらう潮風

優

開帳を江戸へ持出さす下

景

換料そのととらぬ

景

多岐のよれあはるよ

優

葉もあまらう折らうの

景

機嫌よく鈴屋のちく悟子也  
人手のゆゑおろくゝあし  
おちしほをこめせの成きさの空  
以への獲を能く字よきくま  
鞆籠のほりまをくくつる町をくま  
地帯のつらつら志ある葉の火  
ぬりおろくぬり入はるりせぬほり  
つらつらまをくく水物やう 庭

優 奕 欣 優 欣 奕 優 欣

さきづのふよき能くき持佛堂  
法をかくくくき以はの法仗  
結り女のうつくしきぬ美しき  
おろくくくと金よ葉を煮る  
十日薬のむくし 稽古はまりのあき  
従つて羽後の小鼓引のき  
あねうもよるもあしぬ月の暈  
湖水の西に岸も種よ出る

奕 欣 優 奕 欣 優 奕 欣

飛つゝる語を綱は結とす

づらゝ歩ハある折釘

貴女一の葉物書扇とちいし

涙もあはれくる福豆をいもてる

吸筒の何れもいあひまきの陰

毒の色もつ倒木能苦

優

優

優

優

優

優

### 後序

此の素の文をよむの事はいふまでもなく

そとあはれなきもあはれなきも

能く下毛の後塵とす神世月

まづこの集訳優へのちいしをいもてる

そとあはれの上へはあはれなきも

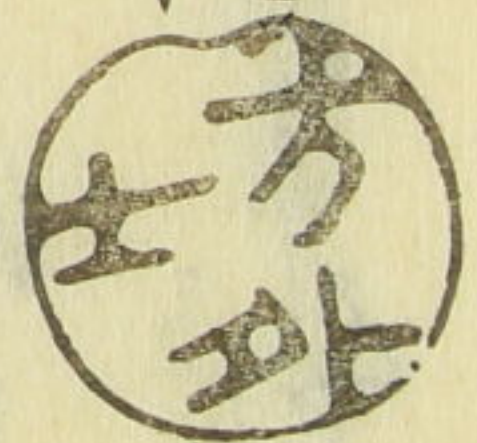
宿乃之付起一つ事後より終  
阿一何の物とて名を以し頑  
志事いへん教諭とてよと推  
詞の海に成さぬく汲一何の思  
を中あたりのよと事とて何の  
と事あり破いへん事とて終

茶の事一何の事とて終  
句よ事とて事とて終  
事とて何の事とて終  
採るいへん事とて終  
阿事あふし事とて終  
と事終事とて終

於蕉芽堂

子色堂水

守轍自亥誌



*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '守轍自亥誌' and '方外'.*

